島根職業能力開発短期大学校紀要
第２号（2015 年４月）

有形文化財の改修に関する地域文化継承活動報告

－「平成郷蔵普請」による地域コミュティの構築－

住居環境科　菊池　観吾

Report on a succession activity of local culture
about the renovation of a tangible cultural property.
－ Constrauction of local communities by
” Reconsuraction of an Edo Era Storehouse in Heisei” －

Kango KIKUCHI

概要　島根県西部を流れる江の川は、古くは江戸時代から明治にかけて山陽と山陰を結ぶという点で交易の要路とされ、「高瀬舟（帆船）」による舟運が発達していた。その江の川の舟運商として現在の江津市桜江地域で繁栄した中村家で、発見された大量の古文書の中に、「郷蔵普請帳」があった。「郷蔵」は、現在でも中村家に有形文化財として現存しているが、その「郷蔵」を昔ながらの方法で、改修することで、自然と共存してきた江戸時代の知恵について学ぶとともに、飢餓に備えるための蔵として、協同作業によって建設した先人の精神を想いお越し現在に伝える「郷蔵普請活動」を NPO 法人「樹冠ネットワーク」が実施した。この活動は、文化庁の平成 22 年度「NPO による文化財建造物活用モデル」に「自然共生に学ぶ郷蔵改修・はじめの第 1 歩」として採択され、更に本活動を記録集にした「平成郷蔵普請帳」も発行した。そして継続的に、この 2 つの活動への支援を、ポリテクカレッジ島根として実施してきた。その活動経過と状況を報告する。

1. はじめに

1.1　郷蔵普請文化継承

過疎高齢化の進む島根県江津市桜江地区において行われた古文書調査（「桜江の古文書を現在に伝える会」が実施）の中で、見つかった「郷蔵普請帳」には、江戸時代の日本の建築文化・技術を後世に伝える精神を、垣間見ることができる。その「郷蔵普請帳」を基に、本来の日本の「自然と共存する文化」（図 1）を郷蔵改修活動の中で、地域の人々が感じ、継承していくことを目標にした 3 年間に渡るプロジェクト「平成郷蔵普請」を NPO 法人「樹冠ネットワーク」が、企画・実施した。このプロジェクトに、私も含めポリテクカレッジ島根住居環境科のスタッフが、当初から携わり、企画提案や技術支援、住居環境科学生の体験実習等を進めて来た。また改修工事終了後に、実施した本プロジェクトの記録集「平成郷蔵普請帳」制作の執筆・編集にも関わり、後世への文化・技術の伝承活動にも継続して携わった。

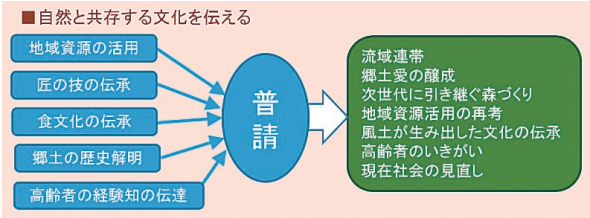

図 1　郷蔵普請文化継承体系

1.2　樹幹ネットワークの活動

この活動の主体団体である「樹冠ネットワーク」の活動・業務（事業活動の概要）は、自然豊かな江の川流域で、山林にある自然の恵みを生かす暮らしの知恵を古文書や高齢者の経験から探り、生活に取り入れる方法を研究、提案していくことである。自然の摂理に沿うことで、便利快適を求める現代が忘れてしまった「待つこと」「備えること」を学び、森林荒廃の解決と里山の環境保全、野生動物にも人にも暮らしやすい地域づくりをめざす団体である。

1.3　郷蔵とは

江戸時代、農村に設置された公共の貯穀倉庫で、本来は年貢米の一時的保管倉庫であったが、中期以降は、凶作飢饉に備える備荒貯穀用として利用、後には貸出しも行われ、公の蔵として地域の人々の協力によって建設された。郷蔵の建物は村有、官有などがあって一定しないが、敷地は免税地で普通は、村役人が管理し全国各地に存在していた。

1.4　普請（ふしん）とは

普く（あまねく）人々に請う（こう）という意味で多くの人々に呼びかけて労役についてもらったことに由来する。社会基盤を地域住民で作り維持していく事を指す。現在では、「普く請う」の意味が薄れ、建築や土木工事の意味として「普請」がつかわれるようになった。今回の「普請」は、本来の意味に基づいて、広く参加を呼びかけ、協働の力で蔵改修を試みようとするもので、後世に引き継ぐ地域の歴史的財産として、また自然を利用してきた昔の人の知恵を伝える場として、新たな地域コミュニティを作りあげることを目的にしている。

2. 郷蔵建物概要（調査内容）

2.1　建物概要

中村家は、石垣を築いて造成され屋敷地で、東面の山を背にして主屋が建ち、郷蔵は南端の石垣の上に建つ。当蔵は、6 尺 5 寸（1970mm）を、1 間とする 2 間× 3 間半の 2 階建ての土蔵造りである。屋根は、小屋組（合掌登り梁形式）に瓦を直接載せる一重屋根で、石州陶器赤瓦を葺いた切り妻形式である。大戸口（主入口）は、平（ひら）側にあり瓦葺きの大庇が掛っている。外壁は、大壁造りで軒裏・ケラバを塗り籠めとしている。改修前は、壁や塗り籠めの一部が剥落し、一部は新建材などで補修されていた。床面積は、1 階、2 階共に 27.16 ㎡、延べ面積は、54.32 ㎡である。屋根勾配は、4 寸 5 分、ケラバ・軒の出は共に 900mm で、軒高は、土台下面から桁天端まで約 4200mm である。基礎部分は、花崗岩の敷石が設置されその上に直接、栗材の土台が敷かれ、柱等の架構材が設置されている。

部材には、経年による木部の不朽が見受けられ、1 階、2 階共床に不陸、傾きがみられる。四隅、平部分の柱は通柱で、妻側は、胴差が入り 1 階、2 階それぞれに管柱が設置されている。現状では、正確な計測は難しいが、梁間方向に約 2 寸（6 ㎝）ずつ意図的な転び（上部が窄んでいる）が観察できるが、これには構造的なバランスを考慮した先人の知恵（対策）であると推測できる。[1)]

写真 1　改修前郷蔵の外観

写真 2　改修前郷蔵の内観

2.2　現状調査

建物調査は、現場での目視、計測（スケール、レーダーレベル機活用）、聞き取り、中村家の古文書などの歴史的資料などを利用して実施した。

①　構造

両妻壁は、屋根を支える棟持ち梁を受け、2 階床は、桁行方向に 3 間半スパンに架かる大梁で支える構造になっている。桁行き柱列は、隅を含め全て通し柱の通し貫構造である。柱頭に桁が載り棟持ち梁へ合掌材（登り梁）が、1 間間隔に架かる。合掌材には鼻母屋、母屋、棟木が載る。垂木は小間中（985/2mm）に架けられ軒、ケラバの出は、通常の蔵より大きく 900mm である。

②　樹種

構造材は、小屋組の梁、桁類は松材を主体とし

ているが、軸組部の柱は、1階で間仕切りを除く柱21本すべてが栗材で2階は、両妻側の管柱6本と1階出入り口脇の柱を除く15本が、栗であり最下部の土台は栗材、貫材は桧材を使用している。

造作材としては、床板類に栗材、開口部枠類や垂木や野地板、根太等（一部竹野地）は、桧材が使われている。

③　番付

柱に漢数字が記されていることが、確認できるがこれが、番付である。番付は、建物が建っていた状態で内側から付けられたもので、解体して再建（移築）する時に、部材の位置が確認できるように付けられたものである。柱のほか貫や母屋、床板、梁、根太等にも漢字や符丁となる記号が、付けられていることから、過去に建物ごと解体して移転した経過があると推測できる。このことからも、本来日本の建築文化は、Reduce であり、現在の Scrap and Build 化とは正反対であると言える。

④　痕跡

1階の西側（階段側）の妻側柱や2階の北側の壁中央付近の柱に鴨居の取り付いた跡があることから、開口部（窓）が設置されていたと考えられる。また聞き取りによると、東側の半間に出入り口、南側の開口部（窓）などは、戦後住まいとして活用された時に設けられたと推測できる。また1階床下の芋窯もその時期のものである。更に繰り返された江の川の大洪水により、床上浸水の被害に遭い、床下にヘドロが堆積したまま残っている。土壁などの外壁の剥落も水害によるものだと考えられる。構造材も経年と水害により下部の土台や柱の腐朽が進行している。また小屋組み材（梁材や桁材）の1部には、シロアリ被害に伴い虫食い穴が多数みられる箇所も存在する。[1)]

3. 郷蔵普請活動の事前計画

3.1　工事体制（人的）計画

この平成郷蔵普請活動は、従来の「普請」の精神（多くの人々に呼びかけて労役についてもらうこと）に沿い、樹冠ネットワークのメンバーを主体に、幅広く一般のボランティアを募る参加型の改修作業を進めた。また専門的技術の必要な大工、左官、瓦葺きなどの重要工事の一部は、専門的技術者の協力を得た。そして工事の全体的なコーディネーター役として、地元で実績、経験のある宮大工職、左官職の技術者に依頼し工事を進めた。また技術・文化の継承を教育の点から地元小中学校の児童・生徒、短大・大学の学生にも体験ワークショップに参加してもらった。

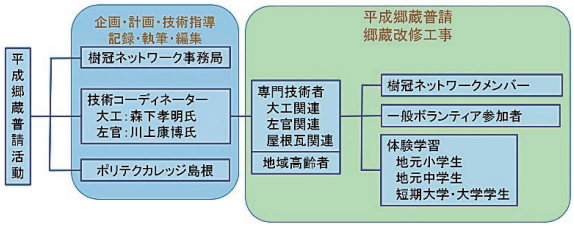

図2　平成郷蔵普請改修工事体制

3.2　材料の調達計画

蔵には、木材、土、竹、藁、石等の自然素材が使われている。改修工事にも、地産池消の文化を継承し、できる限り現場近くでそれらの材料を、「はじめの一歩」として、1年かけて調達する。

材料の調達時期も、それぞれの素材の適期を考慮して、施工時期に合わせて時間を掛けてじっくりと加工準備をする。このように自然の摂理に沿うことで、それぞれ素材はその長所を最大限に発揮してくれる。

写真3　材料調達（真竹）

写真4　材料加工準備（壁土材の練り作業）

3.3　工程計画

材料の調達時期、加工期間、熟成期間、施工の適期、工事期間、養生期間、作業人数等考慮して以下の 3 年の工程計画を経てた。

◆ 1 年目（2011）

① 材料集め
（木材、土、竹、藁、石他）

② 足場組み

③ 材料加工
（壁土練り、縄ない、こも編み、竹加工等）

◆ 2 年目（2012）

④ 解体撤去
壁土撤去
屋根瓦撤去

⑤ 構造材・下地改修・上棟式
（軸組、床組み、小屋組み、床下地、小屋下地）

⑥ 屋根工事（瓦葺き）

⑦ 竹小舞い組み

⑧ 造作
（床仕上げ、階段、窓枠等）

◆ 3 年目（2013）

⑨ 土壁塗り
（荒壁、裏戻し、中塗り、仕上げ）

⑩ 建具制作
（土戸、框戸）

⑪ 三和土土間打ち

⑫ その他仕上げ

⑬ 完成

⑭ 完成を祝う会

写真 5　蔵の壁小舞竹組

4. 郷蔵改修工事（郷蔵普請活動）

4.1　伝統的建築技術の伝承

現在の建築工事は、効果効率・便利快適を優先し、古代から近世まで伝承・積み重ねられた自然素材を活用し、自然の摂理に沿って工事を行う伝統的な建築技術の活用数は減少している。本プロジェクトでは、素人でもできる工事とプロにしかできない内容を判別し、専門的な工事の必要な場合には、伝統建築技術者（大工・左官・瓦工事）に工事の担当指導をしてもらう。そして工事の全体的なコーディネーター役として、宮大工の森下孝明氏、左官職の川上康博氏を配して伝統技術の工事・伝承を行った。

写真 6　伝統建築技術者（瓦葺き作業）

4.2　地域高齢者の経験知の伝達

日本の地域社会における建築も含めた文化の継承は、その地域に居住する高齢者の経験知を伝え聞き、伝承されてきた経過がある。本プロジェクトでも、専門的技術者のサポート役として樹冠ネットワークメンバーでもある地元地域在住の高齢者の協力を得た。材料の調達方法、昔ながらの道具の使用方法伝授、専門的技術者不在時の工事管理役など工事全般において中心的な存在であった。

写真 7　地域経験知の伝達

4.3　参加型の建築作業によるコミュニティの構築

本プロジェクトの最大の目標は、世代や年代を超えた地域コミュニティの再構築であることから、

子供から年配者まで多くの協力を得ることが必要になる。そこで 3 年間の活動期間において、下記の通り合計 20 回のワークショップ形式の参加型改修工事としてボランティアを広く募集した。

① 郷蔵普請はじめの第一歩
- 2010.09.19：赤土採取
- 2010.10.11：竹の採取
- 2010.11.11：わら縄ない、こも編み (1)
- 2010.11.23：わら縄ない、こも編み (2)
- 2011.02.20：竹割、木の枝払い

② 足場づくり、解体ワークショップ
- 2011.06.19：足場作り
- 2011.07.16：部分解体

③ 瓦下しワークショップ～棟上げ式
- 2011.10.10：瓦おろし
- 2011.10.12：瓦あらい、裏書き（記名）
- 2011.10.22：棟上げ式
- 2011.11.27：竹小舞かき
- 2011.12.11：竹小舞かき、巻竹づくり

④ 土壁塗りワークショップ
- 2012.03.04：土練り
- 2012.03.25：荒壁塗り
- 2012.05.05：土無塗り裏戻し
- 2012.06.03：むら直し

⑤ 完成までのワークショップ
- 2012.10.08：竹編み
- 2012.11.25：柿渋塗り
- 2012.12.09：三和土

⑥ 郷蔵の完成を祝う会
- 2013.03.03：郷蔵の完成を祝う会

写真 8　完成した郷蔵外観 1

写真 9　完成した郷蔵外観 2

4.4　次世代への文化伝承教育と地域活性化

以上の全てのワークショック活動において、地域の小・中・高等学校の児童・生徒、大学の学生に参加を呼びかけ、郷土の歴史や自然、伝統技術について学んでもらい、自分たちの住む地域に誇りをもってもらい高齢化が進む地域の活性化に繋げた。

① 2011.05.31：桜江中学校 1 年生・壁土塗り体験
② 2011.06.04：ポリテクカレッジ島根住居環境科学生・壁土塗り体験
③ 2011.06.20：桜江小学校 5 年生・壁土塗り体験
④ 2011.10.10：ポリテクカレッジ島根住居環境科学生・壁仕上げ塗り体験
⑤ 2011.10.15：桜江小学校 5 年生・竹伐体験
⑥ その他のワークショップにも島根大学学生やポリテクカレッジ島根の学生もボランティアで参加
⑦ 2011 年度ポリテクカレッジ島根住居環境の学生が総合制作課題として本プロジェクトの内容を研究報告
⑧ 日本に留学中の海外の学生（アメリカ・フランス他）の参加も複数人ありグローバルな文化交流もできた。

写真 10　体験学習：大工工事（地元小学校）

写真 11　体験学習：左官工事（ポリテクカレッジ）

5. 記録集「平成郷蔵普請帳」の作成

この 3 年間のプロジェクトの内容は、多くの画像や動画で記録してきたが、プロジェクトの完結に伝承・伝達という点で工事内容を時系列的に整理し冊子にまとめる必要性があった。そして樹冠ネットワークから依頼を受けて記録集「平成郷蔵普請帳」の出筆・編集を担当させてもらうことになった。

そして、以下の作成主旨を基に、技術者等へのヒアリングなどを行い、事務局・デザイナーの方と協働で出筆・編集作業を進めた。

① 本プロジェクトの全体概要が解る内容
② 「普請」の精神、多くの人の参加そしてそれを末永く伝える精神が解る内容
③ 専門伝統技術の伝承・伝達ができるよう、時系列的に工事手順が解る内容
④ 技術資料としても活用できるよう、建物概要や図面等も入れて構成する内容
⑤ 一般の方にも興味がもてるよう、専門的な文章の表現を工夫して写真やイラストを中心に内容を構成する。（概要を英語で表記）
⑥ 建築文化だけではなくイベント中、地元の婦人会の協力による、地元素材で造られた郷土料理の提供など食文化の内容も伝える。

写真 12　記録集「平成郷蔵普請帳」表紙

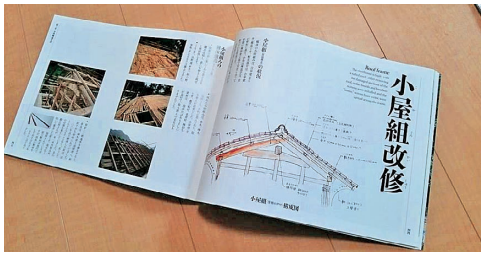

写真 13　記録集「平成郷蔵普請帳」内部

6. おわりに

この 3 年間のプロジェクト「平成郷蔵普請」には、単に有形文化財を時間と人手を掛けて修復したという結果だけでなく、現在社会が忘れてしまった以下のような多くの精神が詰まっている。

◆山林にある自然の恵みを、建材・食材・暮らしに活かす先人の知恵
◆木・土・竹・藁・石等ほとんどの素材が、地産池消を基に使われ、使われた最後は、土に還るという究極のエコロジー精神
◆自然の摂理に従い、じっくりと時間をかけて素材の特性を生み出し活用する技
◆大切な先人の技術継承
◆世代や地域を超えた交流から生まれた協働（結）の精神
◆森林荒廃の解決と里山の環境保全他

などである。そしてこの活動に係った、延べ 1000 人余りの参加者の方たちが、直に感じ取ったこの精神を、今後どのように伝えられるかが重要である。

この活動は、樹冠ネットワークの活動主旨である、地域コミュティの再構築、地域活性化につながる仕組みづくりの導入モデルとして評価されているが、今後如何に活動を継続させることができるか、改修した「郷蔵」の継続した活用方法や保全など今後検討していく必要がある。

文献

1)「桜江古文書を現在に生かす会」報告書～中村家古文書あ・ら・か・る・と～ , p.5-8, 渡辺孝幸氏報告内容一部引用

著者 E-mail Kikuchi.Kango@jeed.or.jp